

サハリン口承文学の地域差

丹菊 逸治

一、はじめに

ニヴフ民族はサハリン島北半部全域から対岸の大陸側アムール川河口地域にかけてを伝統的居住地域としてきた。人口は約五五〇〇人。同地域ではロシア系移住者が人口の大部分を占め、現在では少数民族である。民族固有の言語ニヴフ語はふたつの方言に大別される。サハリン島北部東海岸では東方言^①、サハリン島北部西海岸とアムール川河口地域では西方言^②が話される。それぞれの方言集団の人口は二千数百人だが、話者が減少し現在では流暢な話者は両方言合わせても百人以下と思われる。なお、両方言集団には文化的にも違いがある。

アイヌ民族は北海道・サハリン島南半全域・千島列島全域・カムチャツカ半島南端部・本州島北端部を伝統的居住地域としてきた。人口は数万人と推定される。民族固有の言語アイヌ語は北海道方言・サハリン方言・北千島方言に大別されるが、いずれの方言も現在では流暢な話者はほとんどいない。各方言集

団は文化的にも違いが大きかった。サハリン方言集団の人口は過去から現在まで千数百人〜二千数百人ほどであったと考えられる。第二次世界大戦終了後、日本がサハリン島の領有権を放棄したため他の日本国籍住民とともに北海道以南に移住している。

二、ニヴフ・アイヌ口承文学資料

ニヴフ口承文学資料は十九世紀以降、サハリン方言地域を中心に採録されている。ロシア領内での採録資料約四百話（主に東海岸北部トゥミ川流域）、旧日本領内での採録資料約二五〇話（ポロナイ川流域）、うち西方言資料は五〇話ほどである。アイヌ口承文学資料のうち、本稿で扱うサハリン方言資料はピウスツキによる東海岸の「ウチャシコマ」と呼ばれるジャンルが中心の資料、村崎恭子による西海岸の「トウイタハ」と呼ばれるジャンルが中心の資料、知里真志保の一連の著作、山本祐弘による採録資料など二二〇話ほどである。

両民族の口承文学については残念ながら全方言・全文芸ジャンルにわたる偏りのない資料採録がおこなわれたわけではない。ニヴフの場合九割近くが東方言資料である。サハリンアイヌの場合は東西海岸の採録数は同じ程度だが「文芸ジャンル」に偏りがみられる。それぞれ東海岸では「ucaskoma ウチャシコマ」、西海岸では「tuyah トウイタハ」と呼ばれるジャンルが中心となっている。どちらのジャンルも両海岸にあったことが確認されているため、資料にみられる差異が地域差なのかジャンル差なのかはつきりしないことが多い。そのため、文化的な地域差が早くから指摘されていたにもかかわらず口承文学の地域差にかなする研究はあまり進んでいない。本稿では、サハリン島におけるニヴフ・アイヌ両民族間にまたがって類似性を示す話に着目して、内容面での東西差を指摘したい。そしてその成立過程について推論を試みたい。³⁾

三、ニヴフ・アイヌに共通する異類婚譚

ニヴフ口承文学・アイヌ口承文学にまたがって類似する話が複数採録されているが、それらはニヴフ語東方言資料とアイヌ語サハリン方言資料に集中し、北海道アイヌにはほとんど見られない。サハリン島ではニヴフとアイヌが隣接しており話が伝播した可能性が高い。⁴⁾ 部分的な類似モチーフ、登場人物の類型⁵⁾は叙事詩および散文・創世譚から狩猟の体験談まで多岐にわ

たつてみられるが、話全体が類似している例は特定のサブジャンルに集中する。動物同士の寓話的な交渉を内容とする「動物葛藤譚」と、動物と人間の結婚を内容とする「異類婚譚」である。本稿では「異類婚譚」をとりあげる。

クマ・キツネとの異類婚譚が多いことは従来たびたび指摘されてきたが、それ以外にもカラス・海の神・カレイ・アザラシ・エイとの異類婚譚がニヴフ口承文学・アイヌ口承文学にまたがって採録されている。本稿では後者のようなこれまであまり注目されてこなかった異類婚譚をとりあげたい。それらの話では、たんに結婚相手となる動物が同じであるというだけでなく、話の内容がかなり高い一致をみせる。採録地点はサハリン東海岸北部トゥミ川流域のニヴフ語東方言地域（以下、東海岸北部ニヴフ）、サハリン東海岸中部ポロナイ川流域のニヴフ語東方言地域（以下、東海岸中部ニヴフ）、大陸側アムール地方河口地域（以下、アムールニヴフ）、サハリン島西海岸北部西方地域（以下、西海岸北部ニヴフ）、サハリン西海岸恵須取およびその周辺地域（以下、西海岸アイヌ）、サハリン東海岸相浜・小谷（以下、東海岸アイヌ）である。

四、クマ・キツネとの異類婚譚

クマとの異類婚譚はクレイノヴィチが指摘するようにニヴフ民族の居住地域全域で多くの資料が採録されている。荻原真子

(一九九六)ではアムール・サハリン地域のクマ伝承について「熊と人間の婚姻」「山のヒト」「慈悲深いクマ」に分類している。「萩原 一九九六・二〇八」が、それらのうち「熊と人間の婚姻」の資料にはアイヌの伝承と類似性が特に高いものがある。藤村久和はその類似について、サハリン東海岸のアイヌからウイリタへの伝播の可能性を指摘した「藤村 一九八五・一二八」。だが、ニヅフにも同様に細部まで一致する資料があること、北海道アイヌの資料にも類似の資料があることから、たんに近年の時間的・空間的に限定的な伝播ではない可能性が高い。

キツネとの異類婚譚は「キツネが人間に変身して悪さをする」という話群の一部である。見破られて撲殺されたキツネたちの生き残りがサハリンのキツネの先祖だという由来譚、留守番をしている子どもたちを「キツネの女性」という化け物が殺そうとする(魂を奪う)話など多様だが、中でも「金持ちの人間に化けて女性と結婚しようとしたキツネ」にかんする話はサハリンにおいてニヅフとアイヌの間に類似性の高い例がみられる。これらの話の存在は、たんにクマ異類婚やキツネ異類婚という大きなテーマの民族横断的な問題設定だけでなく、具体的な伝播とその経路にかんする議論が可能であることを示している。

五、カラスとの異類婚譚(資料1)

「カラスたちが人間の少女を自分たちの家に閉じ込める。彼

女は夜這いをかけてきたカラスを拒否する。人々が彼女を人間の村に連れ帰る。カラスたちが村に来て抗議する。人々は刀と絹を賠償として提案するが、カラスたちは犬の肉を要求して受け取る。(東海岸北部ニヅフ①)

「道に迷った娘がカラスたちの家に迷い込む。彼女は夜這いをかけてきたカラスを拒否して自分の家に逃げ帰る。カラスたちが復讐に来たので、娘の父が鉄鍋や槍を賠償として提案するが、カラスたちは犬の肝臓を要求して受け取る(東海岸中部ニヅフ②)」

「結婚を嫌がった娘が川のヤナに隠れる。母カラスがヤナごと娘を連れ去って木に隠す。三人兄弟がカラスをおびき出して娘を連れ去る。怒ったカラス母子が日月を覆う。三人兄弟は犬の肉でカラス母子をおびきよせて射殺した。(東海岸アイヌ④)」

東海岸北部ニヅフで一例①、東海岸中部ニヅフで二例②③、東海岸アイヌで一例④が採録されている。細部まで類似しており、伝播したものと考えてよい。ニヅフとアイヌの伝承では結末が若干異なるが、犬の肉をカラスが好むという内容は同じである。また、賠償と射殺の組み合わせは他の伝承にもみられる。⁽⁵⁾

北海道では類似した話はない。カラスにかんする伝承はニヅフには少なく、むしろアイヌによくみられる。アイヌの伝承におけるカラスは基本的に人間に害をなす、あるいはトリックスター的な役割を持つ登場人物であり、この内容とも一致するようにみ

える。アイヌ的な登場人物の話なのになぜニヴフの採録例が多いのか、なぜ北海道での採録例がないのかはよく分からない。

六、海の神との異類婚譚（資料2）

「父が六頭のトドからクジラの肉をもらうが、その時にトドの刀をくすねる。すると一人娘がいなくなる。翌春父は海で六頭のトドと娘に会う。さらにその翌年は子どもを抱いた娘が現れ「トドの妻になったのもう戻らない」という。その後アザラシが打ち上げられる。（東海岸北部ニヴフ⑤）」

「二人の姉妹が海の神と結婚しに海に入った。すると両親へのお礼として海から宝物やアザラシ皮が打ち上げられた（東海岸中部ニヴフ⑥）」

「父が結婚したがらない娘を船に乗せて沖に出る。六頭のシャチが現れたので供物と娘をその背中に乗せると沖へ姿を消す。その年は海獣や魚が、翌年は子どものおしゃぶりが打ち上げられた。その後父は、シャチの背中に乗った娘が男の子を抱いている姿を目撃する。（西海岸アイヌ⑦）」

東海岸北部ニヴフで一例⑤、東海岸中部ニヴフで一例⑥、西海岸アイヌで一例⑦が採録されている。東海岸北部ニヴフ⑤と西海岸アイヌ⑦はかなり類似しているが、東海岸中部ニヴフ⑥は少し異なっている。⑥にみられる大きな相違点は「少女が一

人ではなく二人の姉妹になっている」「子どもを連れ海獣の背に乗った姿を見せるといふ要素がない」という二点である。

⑤⑦に登場する海獣は東海岸北部ニヴフ⑤ではトド、西海岸アイヌ⑦ではシャチとなっている。これらの海獣は「海の神」と同一の（あるいは少なくとも非常に深い関係がある）存在と思われる。ニヴフにもアイヌにもシャチ信仰はあるが、東海岸北部ニヴフの伝承ではシャチだけでなくトドもしばしば「海の神」とされるからである。東海岸中部ニヴフ⑥では「海獣」は登場しないが、これは同地域の世界観と関係があるかもしれない。同地域の伝承では「海の神」（海の人）が海獣として登場する話はほとんどないからである。⁶なお非常に類似したシャチとの異類婚譚⑧が北海道日高地方で採録されている。⁷

七、カレイとの異類婚譚（資料3）

「人間の少女が川で発見したカレイと結婚したいと思うが、少女の母親は反対する。三人の男がカレイを木の洞やクマの口に放り込むが、カレイは逆にクマを捕殺する。カレイは人間の姿になって彼女と結婚し両親は謝罪する。（東海岸中部ニヴフ⑨）」

「カレイとカジカが二人でカカンの娘に求婚する。カレイは娘と相思相愛になるが、カカンは反対する。カレイは狩に行きクマの口から入って捕殺する。カレイは娘と結婚しカカンは謝

罪する。(東海岸アイヌ^⑩)」

この話は東海岸中部ニヅフで一例^⑨、東海岸アイヌで一例^⑩が採録されている。両者はプロットが異なり、ニヅフの伝承は主として少女の視点から、アイヌの伝承は主としてカレイの視点から語られている。ニヅフの伝承では少女が川でカレイを発見するのが発端だが、アイヌの伝承では「カレイとカジカが二人でカカンの娘に求婚する」ところから話が始まる。どちらの伝承でも一部伏線らしきものが解決されないままになる。ニヅフの伝承ではカレイを虐待する「三人の男」の正体が語られずじまいである。アイヌの伝承では「三人の男」は登場しないが、やはり「一緒に旅だったカジカ」についてそれきり語られずじまいになっている。両方の伝承が不完全だということからは、ともに本来の伝承から何か脱落している可能性が考えられる。

八、アザラシとの異類婚譚(資料4)

「兄と妹がいる。兄がアザラシと恋に落ちて逢瀬を重ねる。妹は兄の服を着て浜に行き、アザラシに銚で傷を負わせる。兄はアザラシの兄たち、カモ、イルカの助力で水を越えアザラシの国へ行く。兄はアザラシを巫術で治癒させ二人は結婚した。(アムールニヅフ^⑪)」

「姉と妹がいる。姉は毎日アザラシを獲ってくる。妹が姉を尾行して浜に行くと、姉はアザラシに変身してアザラシ狩りを

している。妹は姉にアザラシになる術を教わり、アザラシ狩りをする。その後二人の男性が現れ彼女らと結婚した。(西海岸北部ニヅフ^⑫)」

「夫婦がいる。妻が美しい男(海獣?)と密会している。夫は(妻を尾行し?)男を銚で傷つける。妻は水中を歩いて男の洞窟へ行き、看病する。傷がいえると2人は結婚した。(西海岸アイヌ^⑬)」

この話はアムールニヅフ^⑪と西海岸ニヅフ^⑫(ともに西方言地域)、西海岸アイヌ^⑬の合計三例が採録されている。アムールニヅフの伝承^⑪では主人公は男性、西海岸アイヌの伝承^⑬では主人公は女性であり性別が逆転している。地理的に両者の中間地点にある西海岸ニヅフの伝承^⑫では主人公が二人姉妹となっている。また、^⑫は異類婚譚ではないうえに話の後半部分が^⑪^⑬とは大きく異なる。だが、妹が姉を尾行して現場に行くこと、「負傷」すること、最後に唐突な結婚で終わることなどから、大きく変形してはいるものと同じ系統の話という可能性が高い。⁹⁾

東海岸でもアザラシとの異類婚譚は^⑭^⑮の二例が採録されているが、大きく異なった話となっている。それらには「尾行」「負傷」などの要素がなく幸福な結婚という結末にもなっていない。背景には東西ニヅフ口承文学・伝統的世界観における「アザラシ」の在り方の違いがあると思われる。東海岸においては「トド」が神性を持った海獣であるのに対し「アザラシ」はたんなる動

物にすぎない。¹⁰⁾

九、エイとの異類婚譚（資料4）

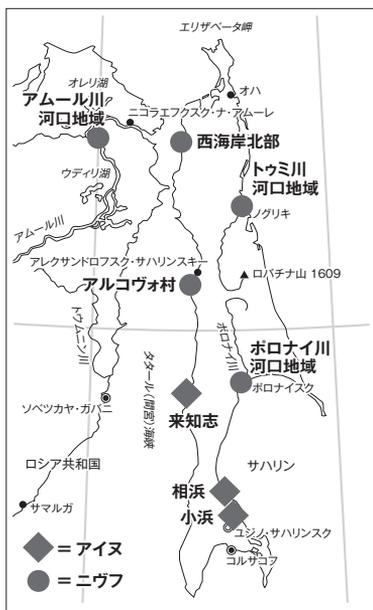
「ルイ氏族の男性が釣ったエイと性交して放した。春にエイが息子連れってくる。息子は一年で成人し刀でクマを狩るようになるが、あるクマと決闘して相討ちになる。（東海岸北部ニヴフ¹⁶⁾」

「ある男性が釣ったエイと性交して放した。生まれた息子は父の元へ行き成長する。彼は山で音がするので見に行き、不思議な刀鍛冶たちから刀を手に入れる。彼はその刀で化物を退治して回った。刀は今でもアイヌ人が持っている。（東海岸中部ニヴフ¹⁷⁾」

「ある男性がエイと性交する。生まれた息子は何年か後父を訪れてくる（西海岸アイヌ¹⁸⁾」「人々が山で音がするので見に行き、不思議な鍛冶から鍛冶技術と道具・刀などを手に入れた。（西海岸アイヌ¹⁹⁾」

東海岸北部ニヴフで七例¹¹⁾、東海岸中部ニヴフで一例、西海岸アイヌで一例採録されている。東海岸北部の伝承は採録例も多く、しかもいずれもかなり類似している。話の内容としては「刀でクマを狩る」というタブー違反（クマは槍で狩らなくてはならない）が重要な要素となっている。東海岸中部の伝承では「刀で化物を退治する」という話になっており、これはむしろア

イヌの伝承と連続性がある¹²⁾。刀を海ではなく山から入手することのほかにも、化物を切る場面がアイヌの他の伝承と一致する¹³⁾。



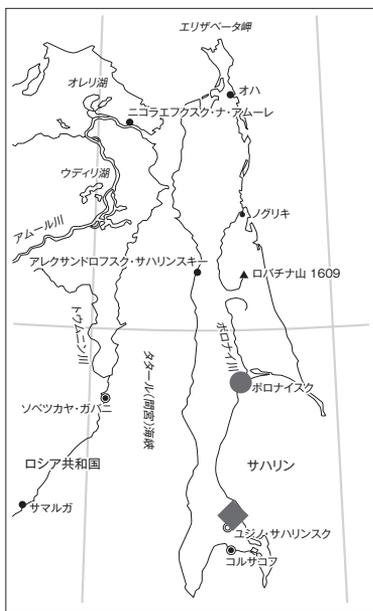
引用資料の採録地

十、異類婚譚の東西分布

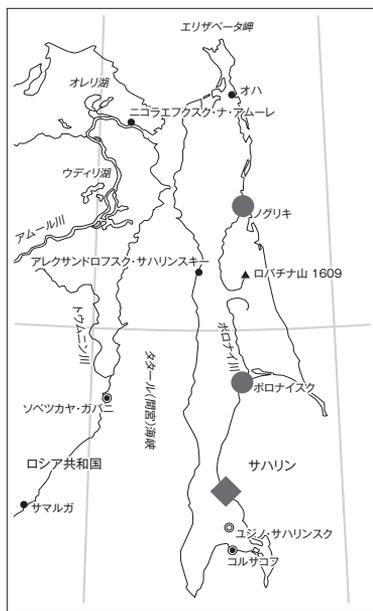
カラス・カレイ異類婚譚は東海岸沿いに、アザラシ異類婚譚は西海岸とアムール地方に、そして海の神・エイ異類婚譚は東海岸と西海岸にまたがっている。

まず、カラス、カレイ、アザラシを相手とする異類婚譚は東西の差異とみてよい。これらはニヴフ・アイヌ両民族にまたがって東西で海岸沿いに伝播したものと考えられる。ポロナイ地域にはかつて「タライカ」という強力なアイヌ集落があった。東海岸アイヌにはタライカのアイヌと東海岸ニヴフとの婚姻関係

を示唆する伝承がある。⁽¹⁴⁾ また二〇世紀にも東海岸アイヌと東海岸のウイльта民族との婚姻関係の事例がある。西海岸においても、東海岸ニヅフの伝承としてルイ氏族とアイヌ民族との婚姻関係が語られている。⁽¹⁵⁾ だが異類婚譚の類似はそれらの婚姻関係



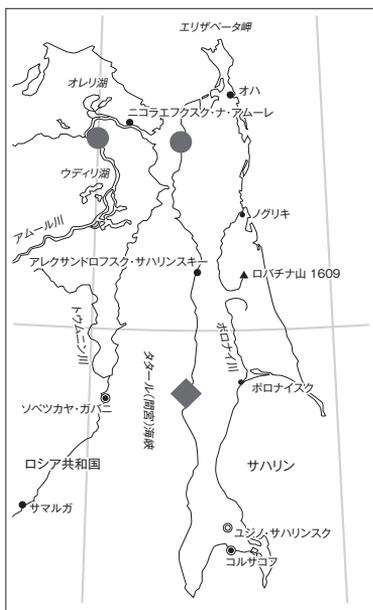
カレイ



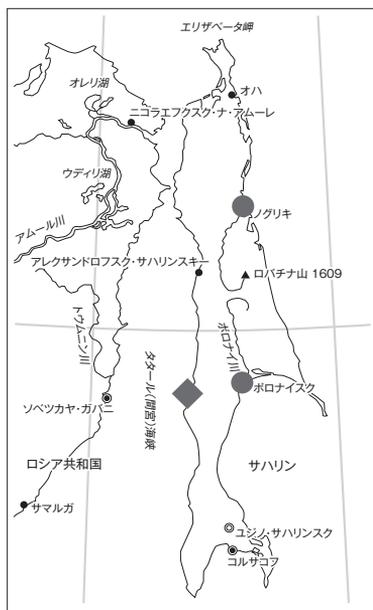
カラス

の伝承以上であり、ほとんどサハリン島を縦断するほどの広がりを見せている。

海の神・エイとの異類婚譚の分布には、おそらく過去にお



アザラシ



海の神/エイ

けるニヅフ民族の移動が関係していると思われる。ルイ氏族は東海岸中部ポロナイ川流域にも居住する。ポロナイ川流域のグループは西海岸のルイ集落（現在のアレクサンドロフスク・サハリンスキー近郊）から移動してきたと実際に現在まで傳承されている。⁽¹⁶⁾ルイとポロナイ川流域は、古くからトゥミ川とポロナイ川の分水嶺を越えるルートでつながっていた。⁽¹⁷⁾二十世紀には恵須取からさらに南下し來知志を通って横断するルートも利用されているが、これももつと古く遡る可能性がある。⁽¹⁸⁾

十一、結論

(1) ニヅフとアイヌの口承文学の全体像はかなり異なる。それぞれの内部の差異があるとはいっても、両民族の口承文学の間の差異は、形式・内容ともそれ以上に大きい。高い類似性がみられる話が含まれるのはいくつかの体験談（アイヌにおいては三人称で語られる *ucaskoma* ウチャシコマ）および動物葛藤譚と、今回とりあげた異類婚譚（アイヌの傳承例の半数ほどは三人称で語られている）である。これらの類似の多くはサハリンにおいてであり、北海道アイヌにまではおよばない。

(2) サハリンのアイヌ民族は北海道から北上したと考えられている。ニヅフとの差異は接触当初から存在したはずである。東海岸・西海岸でそれぞれ婚姻関係が結ばれ、交流が始まるよう

になってから相互影響が始まったのであろう。サハリン島では地形的に東西の移動が南北方向に比べて困難であり、口承文学の東西の差は人間の移動の少なさにも起因すると考えられる。

以上のことから、異類婚譚にみられる「アイヌ・ニヅフにまたがる東西差」はアイヌ民族がサハリンに北上し、ニヅフ民族との南北の住み分けが確立したのちにできあがったものと考えられる。

さらにいえば、北海道アイヌ口承文学においては、外部から伝播してきた話はしばしば「パナンベ・ベナンベ譚」のように三人称形式で語られる散文物語として取り込まれるが、サハリンでも同様のことが起きたのではないだろうか。とすれば、サハリンアイヌ口承文学において三人称で語られる傳承群（全体としてみると *tuyah* トウイタハ、*ucaskoma* ウチャシコマなど複数のジャンルにまたがる）は比較的新しく成立したものと、いう可能性が考えられる。

資料1「カラスとの異類婚譚」

- ① (ニヅフ・東海岸北部) カラスの人々は全員で一つの家に住んでいた。そうやって暮らしていた。一人の人間を捕まえて自分たちの許に留めておいた。一羽のカラスが彼女の夫になりたいと思った。彼女のそばに座った。彼女の服を

つついて引つ張った。するとその女性は裁縫用の台板を持ち上げて、彼の背中を上から叩いた。「パッ!」。するとそのカラスは自分の母親に言った。「母さん、見てくれよ! 台板で私を叩くよ、上から私を叩くよ!」。すると彼の母は言った。「カラスのやり方なんだから女を捕まえなさい。連れて来て、カラスのやり方なんだから殴りつけなさい」。さて、別の人々が、本当の人間の人々がやって来た。自分たちの女を確保して、家に連れ帰った。自分たちの許に留めておいた。すると我らがカラスは、その人々と戦うために飛んで行った。その人々は外に出てきた。「よし、お前には何が必要なんだ? 鉄の刀をお前にやってもよい。もしそれは要らないというなら、絹の丸ごとの生地をお前にやる」。すると我らがカラスは自分の希望を述べた。「もしも鉄の刀をもらったとしても、どこにそれをしまつて置く。もしも絹の丸ごとの生地をもらったとしても、どこにそれをしまつて置く。私の希望はこうだ。話して聞かせよう。シラミだらけのイヌを殺して、持って来い。一匹だけがいい、その内蔵を抜き取つて投げろ。我々は集まつてそれを食べよう」【ピウスツキ 二〇〇三】

② (ニヴフ・東海岸ポロナイスク) 娘があるとき道に迷つた。彼女は一軒の家を見つけたので入つた。すると老婦人が麻糸をつむいでいる。老婦人は、「息子たちが山から帰つ

てくる」という。夜になるとカラス五、六羽が帰つてくる。老婦人は「私の息子たちだ」という。就寝すると一羽のカラスが娘に夜這いに来る。老婦人は夜通し糸をつむいでいる。娘はカラスを叩く。カラスが「かあさん、この女が私を叩いた」と言う。老婦人は「(相手は)女なんだからけつたり叩いたりすればよい」と答える。娘は怒つて木で叩いてカラスを殺す。娘は翌朝早く家に帰る。すると兄のカラスたちが殺された弟カラスの復讐に来る。娘の父は大きな耳が三つついた鉄鍋を(償いに)やる」と言うが、カラスたちは「鍋は置く場所がない」と答える。そこで父は「三尺くらいの槍を(償いに)やる」と言うが、カラスたちは「置く場所がない。イヌの肝臓が欲しい」と答える。そこで小さいイヌを殺してはらわたを投げてやった。カラスたちはそれを食べて帰つた。【アウステルリッツ 一九九二】

③ (ニヴフ・東海岸ポロナイスク) 娘が恋人の元へ行く途中で日が暮れ、老婦人のいる草小屋に宿を借りる。夜になると老婦人の息子である一二羽のカラスが帰ってくる。一番上の兄のカラスがよばいにくるが拒否する。老婦人は「優しくしてやれ」と息子に言う。次兄のカラスのよばいも拒否する。老婦人は「殴つていうことをきかせろ」と息子に言う。三番目のカラスがよばいにくると首をひねつて殺す。娘は朝早く逃げ出す。途中に空き家を見つけてそこに住み着く。

その後やってきた男がなぜか好きになり結婚する。あるとき、カラスが「俺の兄を殺した」と鳴くので夫は妻を疑い、夫婦仲が悪くなった。「服部健 一九五六」

④ (サハリンアイヌ・東海岸) サヌイベシ村の上流に一人の娘が住んでいた。(以下娘の自叙) ある日樹皮を剥ぐ若者が来て求婚されるが断り、カゴに乗って川を下りサヌイベシのヤナに隠れる。(以下三人称叙述) 翌朝、カラスが娘を見つけ、「嫁を見つけた、カア」と鳴く。母カラスがカゴごと娘を連れ帰り、高い木に隠す。サヌイベシの三人兄弟がそれを知って娘を奪おうと計画する。巫術者を呼んで巫術をさせてカラスをおびきだし、その隙に娘を連れ去る。怒ったカラスの母子が太陽と月を覆ったので世界中が真っ暗になった。サヌイベシの若者はイヌの肉でカラス母子をおびきよせて射殺した。その後は平穩に暮らした。「知里真志保 一九五二」

資料2 「海の神との異類婚譚」

⑤ (ニヅフ・東海岸北部) 夫婦と美しい娘がいた。ある飢饉の春、父が海岸に行くと、クジラと六頭のトドが現れる。トドは刀でクジラを切り殺し、岸にあげる。父は刀をとりにクジラの肉を切り取って帰る。皆で肉を食べ母は刀を

箱にしまう。翌朝、娘の姿が消える。夫婦が一日探して帰ると家にいたが、再び家を出て二度と戻らなかった。翌春、父が海に行くと六頭のトドが現れる。一頭の背に娘が乗っており「刀を取ったからトドが怒った。母に話し来年また来い」と言う。翌年父が海岸に行くと、娘が子どもを抱いて現れ「トドの妻になった。もう戻らない」と言う。その後彼らが海岸に行くといつもアザラシが打ち上げられているようになった。「タンジナ 二〇〇〇」

⑥ (ニヅフ・東海岸ポロナイスク) 二人の姉妹がいた。一人は背中の皮で作った服を着ていてゴフクマル (golkmarr) と呼ばれた。もう一人は腹の皮で作った服を着ていてヘチュクマル (heckmar) と呼ばれた。二人が海の神様 (海の人) に嫁に行くことになり、夜のうちに海に入ってしまった。すると大きな音がして海から宝物、海豹皮などが陸にほうりなげられた。それらは神様 (海の人) から両親へのお礼だった。「アウステルリッツ 一九九二」

⑦ (サハリンアイヌ・西海岸) レプトロのイホホキナイという大きな村に、夫婦と一人娘がいた。娘は結婚を嫌がっていた。人々は「神にでもやるつもりか」と両親を批判した。ある日、父親はイナウを削り、妻に供物を作らせ、娘を連れて浜に出た。そして「お前を神の嫁にする」と言って着

飾らせ、イナウと供物と一緒に船に乗せた。沖に出ると六頭のカムイ(シヤチ)が現れた。父親はイナウと娘、供物をカムイの背に乗せた。するとカムイたちは沖へ行つてしまつた。何日か後で夫婦が浜に出ると海獣や魚、クジラなどがたくさん手に入った。翌年の春、子どものおしゃぶりにする脂が打ち上げられた。夏、父親はイナウと供物を持つて沖へ出た。するとカムイが現れ、男の子を抱いた娘が背に乗っているのが見えた。夫婦は喜び幸せに暮らした。ただいつもこのように幸せな結末になるとは限らず、化物が割り込むこともある。「村崎恭子 一九七六」

⑧(北海道アイヌ・日高地方) 私はシビチャラの若である。ある日沖漁に行くとき海面に女性が立っていた。女は「私は兄に育てられていたが、ある日沖漁に連れて行かれた。海獣もカジキもとれなかった。兄は『海の神(シヤチ)よ、海獣を患んでくれるなら妹を差し上げます』と言つた。するとたくさん獲れた。兄は私を海に放り込んだ。海神は私を受け止めて保護してくれた。海神は私に『兄がくれば船が壊されると兄に言え』と言つた」と泣きながら歌つた。シビチャラの者は村へ帰るとかつて妹と二人で暮らしていた男を訪れ、ことの次第を語つた。するとその男は沖漁に出かけたまま帰つてこなかつた。おそらく船が壊されたのだろう、と私は語り伝えた。「久保寺逸彦 一九七七」

資料3 「カレイとの異類婚譚」

⑨(ニヅフ・東海岸ポロナイスク) ある女の子が川に遊びに行くとき美しいカレイがいたので捕まえて帰る。母親に怒られて戻しに行く。途中で草小屋に泊まつた。夜明け頃三人の男が現れカレイを奪う。男たちはカレイを木の洞に閉じ込める。カレイは木を切り薪を作つて逃げ出し草小屋の女の子の元へ戻る。夜になるとまた三人の男が現れカレイを奪い、出会つたクマの口の中に投げ込む。カレイは棘でクマを殺し腹を裂いて出た。クマ肉と皮を女の子の元へ持つて帰る。カレイは人間の男に変身し女の子と結婚する。両親の元へ帰る。両親は謝罪した。「服部ノート 整理番号T三九六・五三」

⑩(サハリンアイヌ・西海岸) 小カレイ男とカジカがいた。二人で沖の国のカカン(可汗)の娘に求婚した。(以下カレイの自叙) 娘は私と恋に落ちた。カカンは彼を嫌つた。(以下三人称叙述) 小カレイ男は狩に行つた。クマの口から入つて、尾のトゲで殺し、クマ肉料理などの御馳走を用意してカカンを招いた。カカンは恥じて和解した。小カレイ男は娘を連れて村に帰つた。子孫に語り伝えて幸せに暮した。「ピウスツキ 二〇〇二」

資料4 「アザラシとの異類婚譚」

⑪ (ニヅフ・アムール地方) アムール川の川岸の村にウルグンとウムラクという兄妹がいた。兄は海が好きだった。流行病で村が全滅し、二人だけが残った。兄は魚や海山で猟をし、妹は家事をした。あるとき兄が海を見てみると、アザラシが上陸して少女(アルガラク)に変身した。二人は愛し合うようになった。兄の様子を不審に思った妹は兄が山猟に出かけた隙に、兄の服を着て浜へ行つた。アザラシを見つけた妹は銚を打ち込んだがヒモが切れて逃がした。帰った兄は自分の服が濡れているのを見て浜へ出かけた。浜には血があつた。アルガラクの兄の二頭のアザラシに事情を聞き、葉草を託すと浜に座る。そばに来たカモの背中に乗って別の島に行き、そこからイルカの背に乗ってアルガラクの住む島に行く。森で薪を切っている彼女の家の使用人に会い、彼女が重篤だと知る。彼女の家に行くとき海の主のシャマン、山の主のシャマンが巫術治療をしている。彼女の父、漁を左右する「槍の老人」が座っている。アルガラクはウルグンに巫術(Cham Indj)をさせると言う。ウルグンが「アルガラクよ、お前が恋しくて疲れ切った。お前が恋しくて眠れない。お前が恋しくて行く。全ての道と全ての上と下を見る!」と歌う。すると銚が外れて

治療する。二人は結婚した。ウルグンの妹は一人で暮らした。「タクサミ 一九九六」

⑫ (ニヅフ・西海岸北部) 両親のいない二人の姉妹がいた。姉はいつも朝早く起きるとアザラシを獲ってきた。あるとき妹は夜寝ないで姉のあとをつけた。姉はアザラシのたくさんいる海岸に行き、(アザラシに変身すると)アザラシと戦って背中を傷つけられた。妹は姉に聞いただし、自分もアザラシに変身したいと言つた。姉は妹を湖のそばのモミの根元につれていき、巫術でアザラシに変身する術を教えた。妹は姉より強く、代わりにアザラシを獲ってきた。やがて二人の男が来て彼女らと結婚した。「白石・ローク 二〇〇一」

⑬ (サハリンアイヌ・西海岸) オヤンルル村に夫婦がいた。ある日夫が猟に出ると、妻は着飾り料理を持って沼に行つた。「パイパーパイ、神なるお方来てください」と歌って踊ると、沼から神(海獣?)が現れ美しい男になった。二人は楽しみ、やがて男は水に帰り、妻は家に帰った。こうして密会が続けたが、あるとき突然夫が現れて男に銚を投げた。銚は突き刺さり、男は水に逃げた。夫は妻を殴って置いて帰った。女は家に帰ったが、男のことが気がかりで、着飾って沼に行く。水に飛び込み、水中を歩いて対岸に出

ると洞窟があった。中では男が苦しんでいる。彼女は男の手当てをし、やがて傷が癒えると結婚して暮らし、年をとって死んだ。〔北原次郎太ほか編 二〇〇三〕

- ⑭(参考…ニヴフ・東海岸) 美しい女がいた。完璧な女性だった。求婚者が来たが気に入らなかった。彼は「悲しい結果だ。私自身も美しいと思っているのだが、嫌われてしまった」と嘆いた。女は海へ行つた。するとアザラシが上陸して美しい男性に変身した。女は「お前を夫にする。顔の美しい男と結婚したい」と言った。二人で男性の実家で老婦人と暮した。老婦人は「獲物を獲りにいきなさい」と言う。だが彼はトナカイが獲れず、妻にはイトウを食べさせた。やがて女の子が生まれた。彼女は成人すると村で人間と結婚した。人間の夫はトナカイを妻と妻の親族に食べさせた。アザラシの夫は「獲物を獲る力がない」となじられて家を出て、別の家で老人と暮らす。やがて老人は死に、自分も腹痛で死んだ。〔シユテルンベルグ 一九〇八〕

- ⑮(参考…ニヴフ・東海岸) 一人の女と男が一緒に暮らしていた。彼の女きようだいは自分の刺繍を広げて刺繍していた。彼女の男きようだいはクロテン猟に行っていた。そちらの川の方へ自分の船を引き上げた。そのそばに座った。タバコを吸った。火打石で火をおこした。

タバコを吸っていたところから、川に沿って上流へ上った。三匹のクロテンを殺した。川に沿って下流に下りた。二匹のクロテンを殺した。大きな太ったアザラシが氷の上に這い出してきて、横になっていた。それに近づいて、頭を叩いた。わき腹を足で蹴とばした。

船を引っ張って水に下ろした。後ろに屈みこんで、前に屈みこんだ。船を操船するのに苦労していた。船が速く進んだので、海は泡だった。船を岸に引き上げた。自分のクロテンを取り出した。上から棚に投げ込んだ。家に入った。彼の女きようだいは自分の刺繍をたたんで、外へ出た。

毛皮を脱いで、太ったアザラシが海から出てきた。銅のアクセサリーをして女性に変身し、家に入った。男は横になっていた。その女性は獲物を持ってきた。そして煮た。男きようだいは、一尋(ひろ)歩いて進み、家を出た。彼女はその女性と一緒に食事をしようと思つて、肉をひっぱりあげて大きな食器に入れた。切つて入れた。「食べなさい! あんた、一人だけ食べようとしなないじゃないか」
「どうしてそんなことを? いい女が料理したとして、私は食べただろう。悪い女が料理したとして、私は食べただろう」。大きなお茶碗に炊いた穀物をよそった。みな食べた。袋を一つ棚から取り出して、煮た。みな食べた。アザラシの女性は外へ出て行つた。腹が裂けて死んだ。〔ピウスツキ 二〇〇三〕

資料5 「エイとの異類婚譚」

⑬ (ニヅフ・東海岸北部) はじめの人間がルイ村にいた。彼は魚を取りに行った。チャグムク・チヨを釣ると、性交して海に放した。それを何度も繰り返した。夏になるとチャグムク・チヨは男の子を産んで海辺に置き去りにした。それを見つけた人が村で話した。父親がこっそり海辺に来た。小屋を建ててそこで子どもを育てることにした。夢に魚が現れ「誰にも知られずに子どもを育てよ。魚も獣もたくさんとれるだろう」と話す。魚も獣もたくさん獲れ、一年で男の子は成人する。彼は日本の刀を持って狩に行き、クマをたくさん殺した。ある日は巨大なクマを取り逃がす。夢に傷を負った山の人が現れ、決闘を求める。彼らは決闘する。チャグムクの子は刀が抜けず、素手で戦う。丸一日格闘して二人とも死んで横たわった。

「シュテルンベルグ 一九〇八」

⑭ (ニヅフ・東海岸中部) ある男が見たこともない魚を釣った。男は魚と性交すると海へ投げた。魚は人間の子どもの産んだ。子どもは成長すると父を探しに出た。ある日男のところ立派な若者が来てカスベ (casmusk) の子だと名乗った。男はすぐに自分の子だと悟った。若者は何でも

上手だった。ある晩、新間の河岸の山上から音がするので若者は見に行った。二人の男が刀鍛冶をしていた。近くには天からヒモが下がっていた。若者が刀を一本つかむと気絶した。気づくと男たちは消えていた。刀は手に残っていた。その頃川に化物が出た。彼が魚皮衣を着て川を渡ると、何かが頭で松明をつけてやってきた。彼は切りつけると気絶した。気がつくると刀は血だらけだった。彼は東海岸で一ヶ所、西海岸で二ヶ所の渡河場所まで化物を退治した。その刀は今でもどこかのアイヌ人の家にある。「服部ノート 整理番号T三九六・三三五」

⑮ (サハリンアイヌ・西海岸) 厳しいタブーではないが、普通はカスベを食べない。この魚と結びついた話のせいである。昔ある男がカスベと性的な関係を持った。この魚の性器が人間の女ものによく似ていたからである。この関係から美しい少年が生まれ、何年も経ってからこの男のところへ自分のことを知らせに現れた。「オオヌキ 一九七四」

⑯ (サハリンアイヌ・西海岸) 東海岸マヌイのアイヌ人たちが、トトロポホケ山の頂上から音がするのを聞いて見に行った。すると、キツネの尻尾を生やした美しい男たちが、鉄鍛冶をしていた。人々が大声をあげると、男たちは驚いて、鉄鍛冶道具、刀、さやなどを置いて逃げた。

鉄鍛冶をキツネの神であるフーレ・カムイ〔赤い神〕から学んだ起源である。〔オオスキ 一九七四〕

引用文献

- アウステルリッツ、ロバート(著) 中村チヨ(口述) 村崎恭子(編)『ギリヤークの昔話』一九九二 北海道出版企画センター
- オオスキ 一九七四 Ohnuki-Tremey, Emiko.---, 1984 [1974] *The Ainu of the Northwest Southern Sakhalin*, Waveland Press.
- オタイナー 二〇〇〇 Otaina, Galina. 2000. "The Nivkhi Folklore", Ed. Golubečkova, Valentina and Hvišiasvili, Zurab. *Practical Dictionary of Siberia and the North*. European Publications, Moscow. 624-625
- 萩原眞子『北方諸民族の世界観 アイヌとアムール・サハリン地域の神話・伝承』一九九六 草風館
- 北原次郎太・田村雅史ほか編『アイヌ語権太・名寄・釧路方言の資料』科学研究費補助金(特定領域研究(A)「環太平洋の消滅に瀕した言語」にかんする急調査研究)成果報告書 A2-039 二〇〇三 大阪学院大学情報学部
- 久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』一九七七 岩波書店

- クレイノヴィチ 二〇〇一 [2001] 1973. Krejnovič, Eruhim. 2001. *Nivhgu, Ūžno-Sahalinsk* (翻訳 クレイノヴィチ、E・A 榎本哲訳『サハリン・アムール民族誌』一九九三 法政大学出版局) 1973. *Nivhgu, Moskva*
- シュテルンベルグ、L 一九〇八 Šternberg, Lev. 1908. *Materialy po Izučeniū Gilačckogo Ūzkyka i Fol'klora*, Tom 1, SPb.
- 白石英才・ローク、ガリーナ 二〇〇一「ニヴフの三つの民話」『ユーラシア言語文化論集』第四号 千葉大学ユーラシア言語文化論講座 一四一―一五八頁
- 高橋盛孝『樺太ギリヤク語』一九四二 大阪朝日新聞社
- タクサミ 一九九六 Taksami, Čuner. 1996. *Axt Ūrgun* (axt prvj), Ūžno-Sahalinsk.
- 丹菊逸治二〇〇九 a 『ニヴフとアイヌの異類婚譚』(千葉大学 審査学位論文) 未刊
- 丹菊逸治「V. サンギ氏録音による1970年代ニヴフ語音声資料」『Iahcara』第六号 二〇〇九 Iahcara 編集委員会(私家版)
- 丹菊逸治「アイヌ異類婚譚における「守護神」―ニヴフ民族の伝承との比較から」『和光大学表現学部紀要』第十一号 二〇一〇 和光大学表現学部
- タンジナ 二〇〇〇 Tanzina, Nadežda. 2000. *Krasavica Doč, Zapis' na Nivskij Ūzyk N. Tanzinoj, pererod na Russkij Ūzyk i Savel'evoj, Ūžno-Sahalinsk*.

知里真志保「説話掌編集」『知里真志保著作集』第二卷

一九七三 平凡社 初出「樺太アイヌの説話(一)」『北方研究』

第一輯 一九五二 北海道大学

服部健『ギリヤーク 民話と習俗』一九五六 楡書房

服部健 服部ノート 北海道北方民族博物館収蔵資料

ピウスツキ 一九二一 Piusdski, Bronislaw. 1912. *Materials*

for the Study of the Ainu Language and Folklore. Cracow.

ピウスツキ 2002. *Fol'klor Sahalinskij Ajnov, Užno-Sahalinsk*

ピウスツキ 2003. *Fol'klor Sahalinskij Nivhov, Užno-Sahalinsk*

藤村久和「B・ピウスツキ 樺太アイヌの民話」《3》「こうまん

な女性を嫌う由来話」『創造の世界』第四十八号 一九八三

小学館

藤村久和「B・ピウスツキ 樺太アイヌの民話」《8》ヒグマを

祖先神にもつ由来話」『創造の世界』第五十三号 一九八五

小学館

ペプノフ 二〇一〇 2010. *Pevnov, A.M. 2010. Nivshkie nily I*

skazki, Moskva

松浦茂『清朝のアムール政策と少数民族』二〇〇六 京都大学

学術出版会

村崎恭子『カラフトアイヌ語 資料篇』一九七六 国書刊行会

村崎恭子『カラフトアイヌ語口承資料(一)』昭和六十三年度

科学研究費補助金(一般研究(C))研究成果報告書「樺太

アイヌ語の記述的研究」一九八九 北海道大学言語文化部

村崎恭子編訳『浅井タケ口述 樺太アイヌの昔話』二〇〇一

草風館

山本祐弘『北方自然民族民話集成』一九六八 相模書房

注

(1) サハリン方言あるいは「サハリン東方言」ともよばれる。

(2) アムール方言ともよばれる。なお、サハリン島北部西海

岸の西方言は「サハリン西方言」と呼ばれることもある。

(3) 本稿は日本口承文芸学会第36回研究大会の発表稿をもと

にしているが、二〇一二年七月二五日に札幌で開催され

た定例研究会「北フォーラム」でも発表し、田村将人氏

はじめ多くの方から有益なご教示をいただいた結果でも

ある。ここで感謝の意を表しておきたい。

(4) 近年では荻原眞子、藤村久和、丹菊逸治などが注目して

いるが、それ以前からもこの類似は「アイヌ口承文学に

おける北方的要素」として漠然と指摘されてきた。

(5) 村崎恭子は、半神半人の英雄ヤイレスーポを騙して懲ら

しめられたカラスたちが賠償に何を支払うべきか相談

しているうちに、ヤイレスーポに急襲されて射殺され

る、という西海岸アイヌの伝承を採録している[村崎

一九八九・一〇八一―一〇]。

(6) ただし、東海岸中部ポロナイ川流域ではシャマンが好ん

で変身する姿がトドであるとされることから、やはりト

ドは特殊な存在とみなされていたようである。

- (7) 荻原眞子はシャチ信仰がアムール・サハリン・北海道、さらにはオホーツク海北部沿岸からアメリカ北西海岸に広がっている(ニヴフの例も報告されている)。「荻原一九九六・二六三」ことを指摘している。アイヌにかんする限り、北海道・サハリンともシャチ信仰と結びついた話と考えることができそうである。だがニヴフにおいてはシャチとの結びつきは弱いように見える。
- (8) 口承文学中の登場人物。異国の有力者らしい。
- (9) サハリン西海岸の伝承には他地域にくらべ大きく変形されているようにみえる例が他にもいくつかみられる。
- (10) アイヌ口承文学における「カムイ⇨神⇨動物」が比較的同質のものと考えられるのに対し、ニヴフ口承文学においては「神(ウズン)」と「動物(ンガ)」は異なる存在である。「丹菊 二〇一〇・二二八」。
- (11) 資料にはほぼ同じ類話を除き二例のみ示した。
- (12) エイとの異類婚譚にかんする連続性については別稿で論じた「丹菊 二〇〇九」。また刀の入手にかんする部分を類話とみなすことについては、二〇一一年一月七〜九日にユジノサハリンスタクのサハリン州博物館で行われた「シユテルンベルグ生誕百五十周年記念国際シンポジウム」の発表「ニヴフとアイヌの口承伝承の相互影響」で示した。
- (13) 暗闇の中で火をともして近づいてくる化物を退治する場面がピウスツキ資料の第五話にある「ピウスツキ一九二二・七六―八五」。
- (14) ピウスツキ資料の第二話「ピウスツキ 一九二二・四五―五八」にみられることが藤村久和に指摘されている「藤村 一九八三・一三三」。
- (15) シユテルンベルグ、クレイノヴィチらが言及している「シユテルンベルグ 一九〇八・二二六―二二七」「クレイノヴィチ 二〇〇一・九三」。
- (16) 高橋盛孝によれば、ポロナイ川流域のニヴフ民族には他地域から移動してきたという伝承があった「高橋 一九四二・三、一六七など」。ルイ以外の氏族は東海岸から移動してきたと思われる。
- (17) 松浦茂は一七四二年のキジ事件以降、アムール地方の商人のサハリン島での交易ルートが東海岸から西海岸にうつったことを指摘している「松浦 二〇〇六・二一―三」。このことが東西の交流をうながしたのかもしれない。
- (18) これらのルートは古くからの交友関係、親族関係を利用して宿泊しながら移動するのが普通である。(たんぎく・いつじ／北海道大学アイヌ・先住民研究センター)